

阪神港

輸出額連続増で 回復傾向強まる

コンテナ量にも好影響

【関西】阪神港(神戸港・大阪港)の輸出貨物が回復傾向を強めている。神戸、大阪両税関の貿易概況では、4月までの金額ベースで神戸港が前年同月比で5カ月連続増、大阪港も同9カ月連続増だった。年明け以降、地元フォワーダーはアジア向け荷動きの活発化を指摘しており、コロナ禍で輸

入に対し生じていた輸出の出遅れ感解消が進みそうだ。

金額ベースでの両港の4月の輸出額は、神戸が23%増の5127億円、大阪は31%増の4139億円。仕向け地で見ると神戸、大阪ともに中国・ASEAN(東南アジア諸国連合)を含むアジア向けが好調で、EU(欧州連合)や北米向けも堅調に推移した。

関西の地元フォワーダー関係者からは今春にかけて、アジアへの輸出が活発化しているとの声が上がっていた。主要国の中国に加え、タイやベトナム・ホーチミンなど、日系企業にも関係の深い地域への需要が堅調だったという。

2020年秋にかけて表面化した世界的なコンテナ不足は、関西からの輸出にも影響を与えている。アジアへの輸出のブッキングが困難な事態は一時的な動きにとどまったが、コンテナ不足下で早期のブッキングが必要となっている。

輸出額の増加はコンテナ取扱量の回復にもつながっている。輸入貨物が主体で輸出は比較的数量が限られる大阪港は、1-3月累計の輸出コンテナ取扱個数が前年同期比9%増の約21万9000TEUとなり、実入りに限っても5%増の約10万TEUとなった。